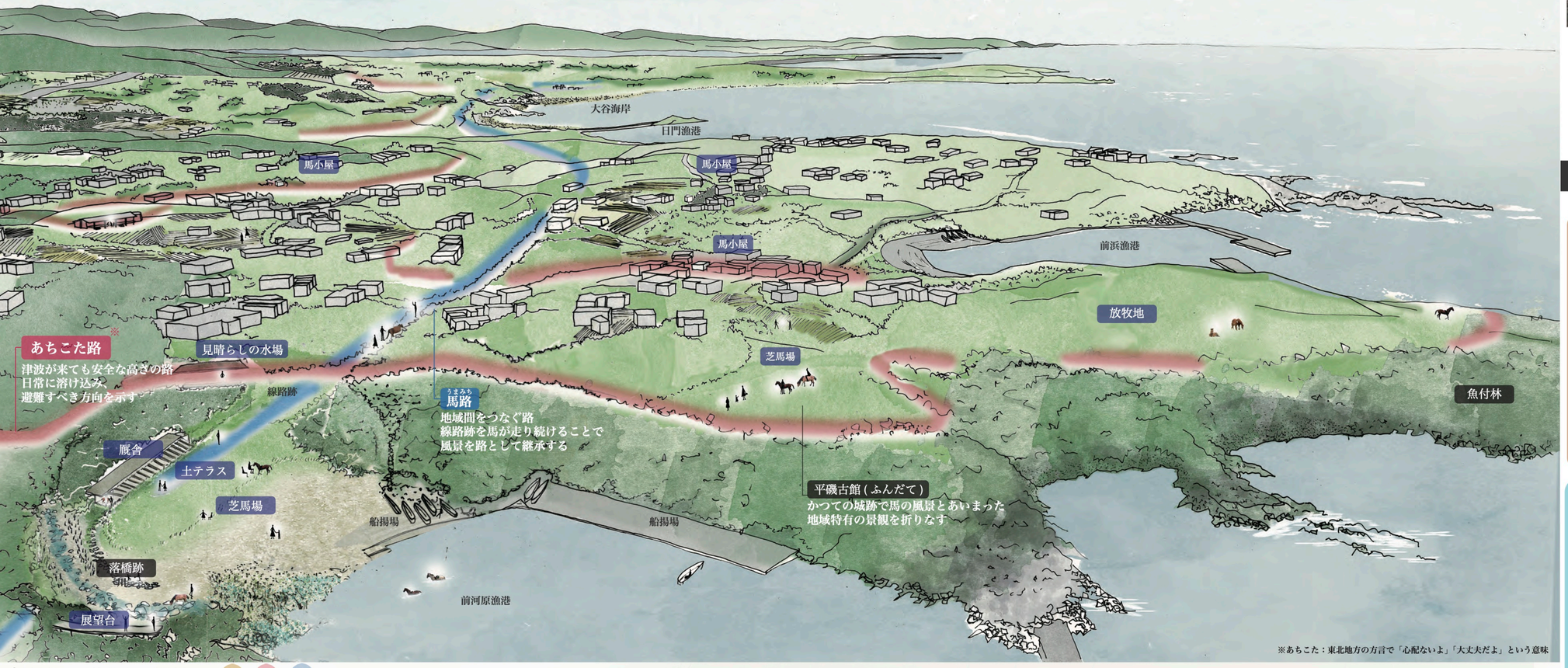
馬と暮らし、海と生きる。

震災により傷ついた人の心と大地の記憶は、馬との新たな暮らしによって記憶の宿る風景へと移り変わる。
馬の行く道は「あちこた」な道となり、馬を育てることで地域は再び繋がっていく。
そして馬との暮らしは豊かな海と、津波から生きのび、再生していくための力を授ける。

風土を守りながら風景を編み直し、継承する「**地域馬**」という提案。



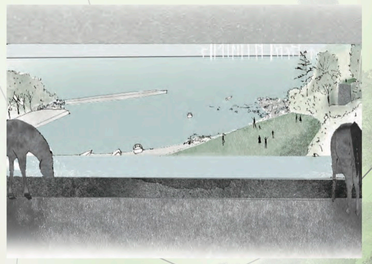
地域馬と暮らしの関係

日常　子供の乗馬練習　餌やり　高齢者との交流　朝の通学　馬糞での有機農業　馬と海に入る　漁に活用する　散歩　トレッキング　荷物運ぶ　心癒し　避難訓練

災害時　馬と避難　人乗せて移動　支援物資運ぶ　ホースセラピー　集団避難　けが人を運ぶ　土砂の中を進む

メモリアル

この場所は「地域馬」を育む中心的場所である。
震災の傷跡を残す落橋跡や線路跡と新しい“馬”や“漁業”の文化が交わる風景がメモリアルとなり、かつて存在した馬産文化と生業としての漁業を継承しつつ、震災の記憶が日々の暮らしの中で受け継がれる。
この場所を発端に“馬”や“漁業”に寄り添う文化を取り戻し、暮らしの風景を編み直す。



見晴らしの水場から漁港全体を見る

見晴らしの水場

長い道の途中で馬が水を飲んだり、人も一緒に休憩したりする場所。
水盤を海側に配置することで水と海とが一体となった景色が望める。
地下水を汲み上げて水を貯め、あちこた路にこの水場を点在させることで災害時の給水場としての機能も果たす。

0. 震災の爪痕が残る本吉町前浜地区

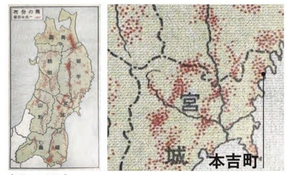
本吉町前浜は宮城県北東部にあり、三陸特有のリアス式海岸の地形に、小さな**2つの船揚場**と**ふんだて**と呼ばれる遺跡を有した町である。
街の中心部をJR気仙沼線が通過していたが、東日本大震災における津波によって流され、現在は**落橋跡**と土手の**線路跡**が残されている。

JR気仙沼線　落橋跡

1. 前浜が育んできた文化・風土

動力源としての馬文化・生業としての漁業

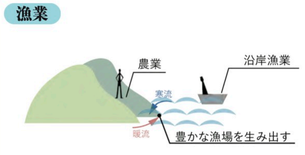
馬文化



東北の馬分布　出典：「最近日本地図」（1932年三省堂）

険しいリアス式海岸において交通網がなかなか発達せず、明治時代ごろまで**馬は交通・輸送の唯一の貴重な動力源**だった。そのため平均で一家に2頭所有しており、町には馬のいる風景が浸透していた。
また本吉は馬産地としても有名で、**馬そのものが産業であり、馬とは切り離すことができない生活を送っていた。**

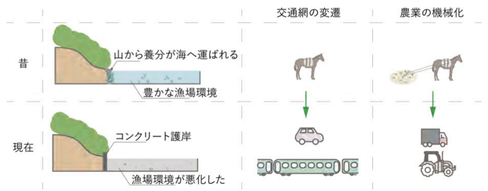
漁業



リアス式海岸と潮目によって育まれた豊かな漁場により陸近くで行う沿岸漁業が盛んに行われていた。小さな湾には激しい波を避けるために設けられた船揚場が点在している。
しかし波が激しく、漁に出られる日が限られる沿岸漁業では取れる魚が少ないため、**農業と漁業の兼業**が多く行われていた。また、**漁港ごとに強固なコミュニティが形成**され、**災害時に強いコミュニティの基盤**となった。

2. 近代化による文化の衰退

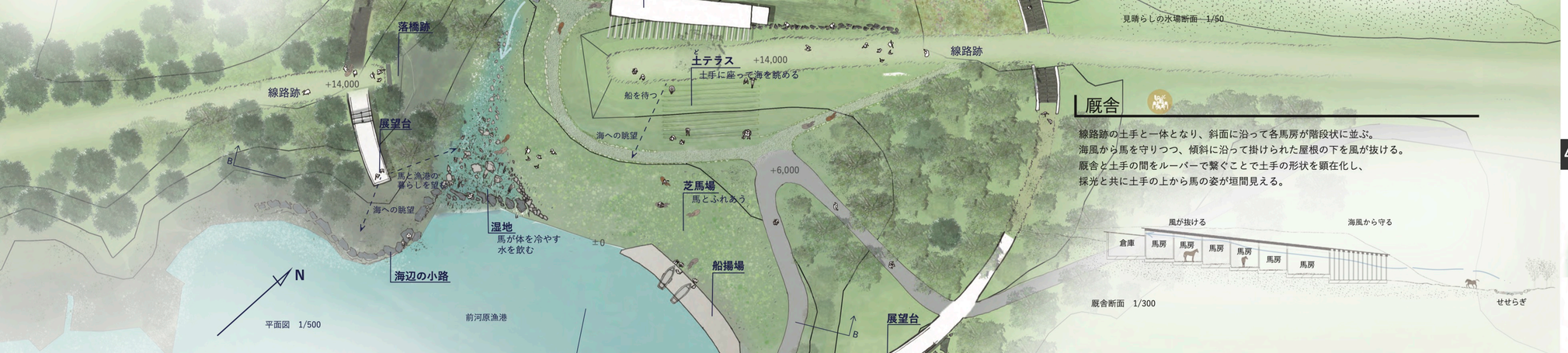
馬文化の消失と漁業の衰退



コンクリートで固められた護岸整備により、土中の養分が海へ運ばれなくなり、**漁場環境が悪化**したことで資源が枯渇し**沿岸漁業の衰退**を招いた。
盛んであった馬産も戦後は**機械化**により消滅し、鉄道や自動車などの**交通網の発達**により、地域に根付いていた**馬文化が消失**した。
また、漁業の衰退はこれまで培われてきた**コミュニティの弱体化**を招き、**地域の繋がりが弱まっていった。**

3. 東日本大震災の発生

交通インフラの崩壊



厩舎

線路跡の土手と一体となり、斜面に沿って各馬房が階段状に並ぶ。
海風から馬を守りつつ、傾斜に沿って掛けられた屋根の下を風が抜ける。
厩舎と土手の間をルーバーで繋ぐことで土手の形状を顕在化し、
採光と共に土手の上から馬の姿が垣間見える。

地域馬との暮らし方

地域で育てる

馬産全盛期は一家に２頭所有していたが、
新しい馬との暮らし方は地域で馬を共同飼育する。
日常生活だけではなく災害時にも馬が人を支え、
さらに地域を越えて町全体の架け橋となる。

海と山をつなぐ

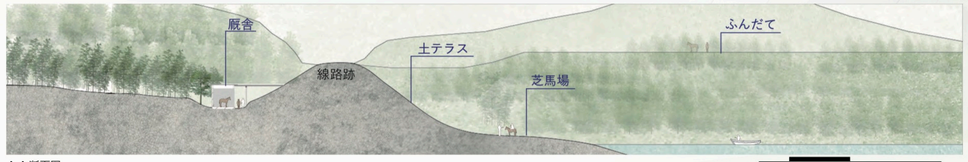
馬は漁業でも活躍し、網を引きや船揚で漁を手伝い、
天候に左右されて海に出られない時期は
漁師が馬を世話する。
馬と漁業が交わることで海と山の繋がりを再構築する。

２拠点の暮らし

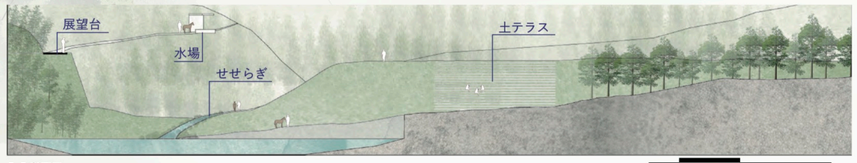
地域の中に存在する馬小屋と
馬が集まる厩舎の２つの拠点で生活する。
朝、子供達の登校と共に厩舎へ向かい、
夕方、仕事終わりの漁師達とそれぞれの家に帰る。
人の生活と結び付くことで人馬の信頼関係を築く。

自然環境の循環

海の豊かさは山・森の豊かさに関係しており海岸斜面に見られる森林は魚付林と呼ばれ、馬は魚付林の上のふんだてで放牧される。
馬糞の堆肥は土壌改善の効果があり、土の保水力向上と馬一頭で約5000 ㎡の農地を有機化する。馬糞により改善された土壌には山からの湧水が海へと流れ、水の流れと共に鉄分や養分が海に流れる。それにより海中に植物プランクトンが繁殖し魚が集まることで豊かな漁場となり生業としての漁業を支える。



A-A 断面図



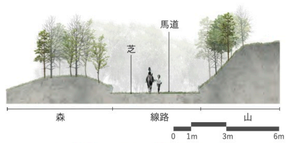
B-B 断面図

馬路を介して繋がる地域・連帯感

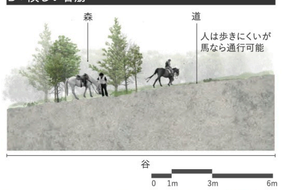
線路跡と馬
失われたインフラ（線路跡）を新しい地域の動力源である馬が走り続けることで、かつて鉄道が通っていたことを示しながら、この線路跡が地区を越えた地域馬のつながる道となる。

■様々な地形によって生まれる風景

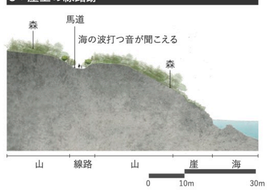
A：線路跡 木のトンネル



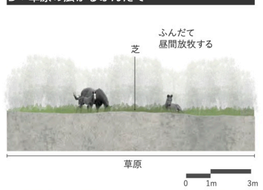
B：険しい谷筋



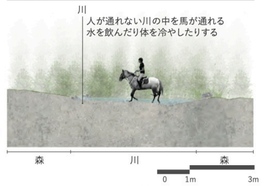
C：崖上の線路跡



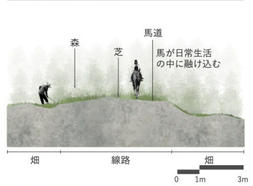
D：草原の広がるふんだて

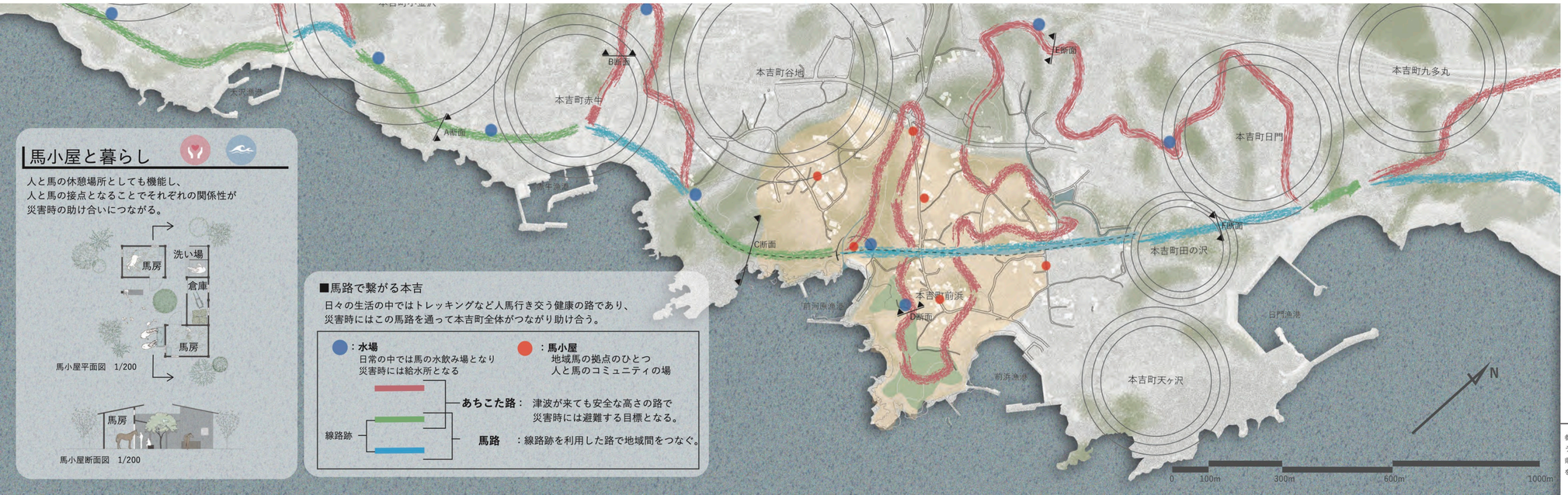


E：道をつなぐせせらぎ



F：畑と隣接する線路跡





馬小屋と暮らし

人と馬の休憩場所としても機能し、
人と馬の接点となることでそれぞれの関係性が
災害時の助け合いにつながる。

馬小屋平面図　1/200

馬小屋断面図　1/200

■馬路で繋がる本吉

日々の生活の中ではトレッキングなど人馬行き交う健康の路であり、
災害時にはこの馬路を通って本吉町全体がつながり助け合う。

●：**水場**
日常の中では馬の水飲み場となり
災害時には給水所となる

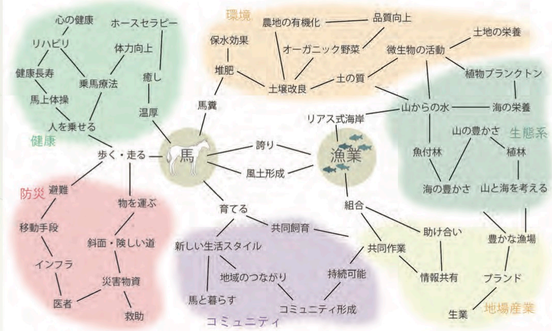
●：**馬小屋**
地域馬の拠点のひとつ
人と馬のコミュニティの場

線路跡
あちこた路：津波が来ても安全な高さの路で
災害時には避難する目標となる。
馬路：線路跡を利用した路で地域間をつなぐ。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では**巨大津波が発生**し、リアス式海岸の険しい地形の中で、地形を克服し整備されてきた**直線的な鉄道敷はその大部分が崩壊**した。
地形に沿わない直線的なインフラを失ったことで**自然支配的な考え方の限界が露呈**したが、この震災によって自然環境との向き合い方、**復興のあり方や防災の考え方を見直す契機**となった。

4. “ 馬 ” と “ 漁業 ” の可能性

災害をきっかけに文化を見直す



東日本大震災の津波被害をきっかけに、“ 馬 ” と “ 漁業 ” 2 つの文化を見直すことで、**地域のポテンシャルを生かした文化の再生**とその**土地が持つ回復力（レジリエンス）の再構築**を図る。

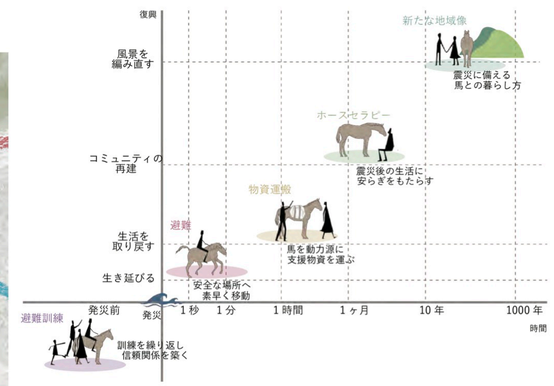
5. 馬と暮らし、海と生きる

「地域馬」というメディアの介在

再び馬と暮らす文化として**「地域馬」**を提案する。
「地域馬」を共同飼育する新しい暮らし方は、**防災復興の助け**になるだけではなく、人々が**心と体の健康**を取り戻し、**弱体化していた漁港コミュニティを新たな形で強化**していく。
それらの暮らしは**生態系の回復にも寄与**し、**暮らし自体が地域の誇り**となり新たな地域像をつくることで**風土を形成**していく。
“ 馬 ” と “ 漁業 ” に寄り添う文化を取り戻すことで**暮らしの風景を編み直し、「震災の記憶を浄化していく」ことを目指す。**

6. 復興の時間的スケール

馬文化の再興と引き出される地域の力



日常的に人馬共同で避難訓練を行うことで**災害時に備えた信頼関係**を築く。
発災直後は高齢者や障がい者は馬に乗り、必要な荷物を馬で運び**避難**する。
また震災後、道路啓開に時間を要する自動車などのインフラに代わって、**いち早く動ける動力源**として支援物資や医療関係者を運ぶ。
そして避難所生活の中の癒しの一つとして馬との触れ合いで非日常の生活に安らぎをもたらし、**震災により傷ついた人の心を癒す。**
馬と共に人の生活と地域の力が取り戻され、馬との暮らし方が地域の回復力を底上げする。このような**馬との関係により生まれる風景に愛着を持ち、新しい地域像が生まれる。**

参考文献：畠山重篤　鉄で海がよみがえる　文春文庫 / 西村佳哲　ひとの居場所をつくる ランドスケープ・デザイナー 田瀬理夫さんの話をつうじて　ちくま文庫 / 廣重剛史　意味としての自然　防潮林づくりから考える社会哲学　晃洋書房 / 本吉町誌編纂委員会 他　本吉町誌　宮城県本吉町 / 赤坂憲雄　3•11 から考える「この国のかたち」 東北学を再建する　新潮選書 / 宮城俊作 他　復興の風景像 ランドスケープの再生を通じた復興支援のためのコンセプトブック　マルモ出版